

津田昇平教話 第十話

令和三年一月十日 朝の教話



人間は人間らしくすればよい。何も求めて不

思議なことをしなくてもよい。

おはようございます。令和三年一月十日をお迎えすることができました。

今日も神様から命を頂いて、また、一日というのは、まっさらな紙を頂いている。キャンバスを頂いている。今日一日、目が覚めた時からまた寝る時まで、この意識があるね、この一日の間、どういうふうにして信心をさせて頂くことができるのか。今日一日を、嬉しく、楽しく、有り難く、過ごさして頂けるようにしたいものですから、そのために、神様と共に生きていく、暮らしていく。今月今日、神様にお縋りをしていく。いつ、神様と生きるのか。いつ、神様に願うのか。今ですよ。今月、今日、ただ今。この今。今こそ、今日こそ。そこが大事です。過去でも未

来でもない。今しか生きることができませんので、今を、この今の今こそ、神様と共に生きる。その一瞬一瞬を、今日も一日、積み重ねていきたいなと思います。

教祖様のみ教えの中で、

人間は人間らしくすればよい。何も求めて不思議なことをしなくてもよい。

一理Ⅱ

佐藤範雄さとうのりお

十二

と、ご理解がありますね。人間は人間らしくすればよい。何も求めて不思議なことをしなくてもよい、と。

これ、どういふことかかって言いましたらね、人間らしいというのは、じゃあ人間というのは、そもそもどんな存在なのかっていうことを、もし神様から問われたら、どう答えますかね。「人間ってどんな存在なんや?」って、神様から尋ねられたら、どない答えますかね、皆さん。

私やったらまあ、まず出てくるのが、「人間は弱いですねえ、神様」って言いますね。「もう、どーにも弱いですね。自分の力じゃ生きることができませんし、存在すらできませんし、まあ、どーにも弱いですねえ」って。

「他には?」って聞かれたら、どない答えましょ。「そうですね、あとは難儀なんぎですわねえー。みんな我情我欲がじょうがよくやらなんやかんやで、なんかあっちにぶつかり、こっちにぶつかりして、なんかひっくり返ってます」って言うて。「ひっくり返って、自分で転んだって思ったらいんですけどねえ、自分であっちこっち見ながら、自転車でも、まあ歩いてでもいいですが、電柱にぶつかって溝にはまって、イタタタ…っていうのは、まあ自業自得ういごてとくなんですけど、せやけど、『誰かが』『なんでこんなふうにして、こっ痛い目にあったんやろうか』『誰のせいや』とかね。誰かのせいにしてしようとしてしまったり、まあ、なかなか難儀ですわねえ…」「そうか」

言いつい。

「他には?」「って言うて。「うーん…そうですねえ。まあ一人じゃ生きていけませんのんで、もう、神様におんぶに抱っこで、お縋りしながらしかやっていけませんねん」「ほんで?」「って言うから、「にも関わらず、神様がお恵み下さっておかげ頂いてるのに、お礼が足りませんねえ」「って。「なんか、もらって当たり前みたいに思ってます。空気があるのも当たり前やし、お天道様お照らしなされるのも当たり前やし、眠れるのも、ご飯食べれるのも、友達がいるのも、家族がおるのも、なーんでも当たり前やと思うてね。なんか、有り難いってことがよう分かってないんでしようねえ」言うて。「だからお礼が足りないから、礼が無いって漢字で書いたら無礼ですから、まあ、無礼やと思います。で、無礼やから、めべ



りもつかうか積んでるんでしょね」

「他には?」「言うて。」他ですか?うーん…ああ、そうやって、まあ自分でなんかご無礼してるって、『あんたご無礼してるで』言うても、たぶん気付いてないです。だから知らず知らずでご無礼して、お粗末して、不行き届きばかりで。まあそんな、難儀ですね。ああ、罪深いって言われてもしかあないですよ、これ。でも本当のところ、神様からお分け頂いている、この体と分け御霊みたまを頂いてますから、この分け御霊様はどこまでも、神様を乞こい慕したう、そういう性質がございますから、ほんとは親である神様好きなんですよ。せやけど、なかなか素直にならんところがあってねえ、難しいもんですねえ。でも本当は、神様のことが好きやった

り、神様と仲良く生きていかんと生きていけないのに、なかなかそれがうまくできなかつたり、教えてくれはる人がいなかったりすると、難しいですね」って、私やったら言います。これは、神様に尋ねられて、私やったらこう答えるっていったら、そんなもんですね。

じゃあ、どういふふうにしたらね、こう、「人間らしくしたらいい」「って神様が仰るわけ。人間らしくしたらまあ、おかげが頂けるといふことなんでしょうね。

今、私が言ったことっていうのは、結構難儀なんぎなことですよ。人間ってね、あほなんですよ。もう、こんなことしてね、あんなことしてね、言う

て。

これ、「何も求めて不思議なことをしなくてもよい」とっていうこの教えから言うと、人間がしてることって、結構不思議なことしてるんですよ。

だってね、自分の力で生きることができないのに、自分でなんか生きてるように勘違いかんちがしてるわけでしょ。なんか、不思議なことですよね。

お天道様てんとうを自分で作ったわけでもないし、水を作ったわけでもないし、自分の力で生まれてきたわけでもないし、心臓も動かしてるわけでもないし、目が見える、耳が聞こえる、しゃべれる、考えられる。自分の力で、なんて言えませんが、これね。なのに、なんか自分がやってるよ  
うな、それだけ神様のお守り頂いて、おかげ頂いて、生かして頂いてる

のにも関わらず、まるでそれが当たり前になって、自分の力でやっ  
てるように思い違いして、勘違いしてしまってるんですよ。

これ、神様からご覧になったらまあ、不思議なもんでしょなあ。不  
思議な考え方やし、不思議な生き方してるんですよ。で、そんだけお  
世話になってるにも気付かずに、「俺おれの力でやってるんや」って、礼を申  
し上げるべき神様に対してもお礼が無いから、ご無礼重ねてる。これま  
た不思議ですよねえ。不思議なことばかりですよ。

不思議なことしてるとまあ、難儀になるんですよ。めぐりを積んで  
るんです。つまり神様の道から、神様からご覧になったら本当の生き方  
からずれてるといふことなんです。だから、「人間は人間らしくしたらいい

いんや」と。それさえしてたら、みーんな幸せになれるんです。

もっと極端に言ったら、もう、究極的に人間は人間らしくしたら、

いきがみこんこうたいじん

生神金光大神になれるんです。神になれるんです。生神になれるんです

よ。分かります？人間は人間らしくしないから、いつまで経っても難儀

なんです。だって、人間って神様の子でしょ？だから、神様の子なんや

ったら、どんどん成長してったら、そらあ神様になるじゃないですか。

おたまじゃくしは蛙かえるの子やし、大きくなったら蛙になりますわなあ。と

んびの子はとんびですし、大きくなったらそらあ、とんびになります。

トンボの子は、ヤゴですね。ヤゴだって大きくなったらそらあ、トンボに

なりますし。青虫は、蝶ちようの子ですから、青虫も大きくなったら蝶になります

す。人間は、神様から命を授けて頂いた、神様の氏子うじこと云うて頂いん  
やったら、大きくなったら、そら、神になるはずなんですよ。

どないしたら？人間は人間らしくしてったら、成長していくというこ  
とです。そうしていくと、本当の人間の姿、つまり、神様の氏子として、  
神様の子として、成長していくんです。そしたら神になるんですよ。

じゃあ、人間らしくするっていうことが、信心すること、ということと  
同じになってくるんですね。信心してくれよ。信心して神になることを  
学ばんといかんのんです。ま、それが信心ですし、それが人間らしく生  
きるということ。だから、人間らしく生きるということと神になるとい  
うこと、別々やと思ったら、そんなことないんですよ。人間が人間ら

しくなるということは、すなわちそれ、究極的に言ったら、人間は神様の子やから神になっていくというのとおんなじことを仰ってるんです。

じゃあ「人間らしくすればよい」ってのはどういうことか、もうちょっと具体的に言うと、人間は自分の力で生きることもしかないし、神様のおかげの中に生まれて、おかげの中で生活をして、おかげの中に死んでいく。もう、何から何まで、ばんじばんたん万事万端、何から何まで、端から端まで、神様のおかげの中で、お恵みを頂いて、恵んで頂いて、養って頂いて、生きることができている。それが人間存在でしょう。

だから、なんでも神様におすが継りして、お世話になって、その分人間と

して当たり前のことやけど、お世話になってるから、神様に「ありがとうございます。」ってお詫言います。いつもありがとうございます。ってお詫をするのが人間やろ、ってことなんです。

にも関わらず、人間っていうのは愚かおろやから、お世話になってることがあっても、知らず知らずも含めて、お礼が足りんかったりね。お粗末をしたり、頂いたものを大事にできんかったり、ええもの神様に頂いても、大事なもの頂いてるのに、大事にできなかったり。大事にしてるつもりでも、全然行き届いてなくて、結局やっぱり粗末にしてしまった。こういうことがやっぱり人間ってあるんですよ。

そら、人間っていうのはそんなところがあるから、だから、知らず知



らずでもご無礼がある。お粗末がある。せつかく神様のおかげを頂いて、神様に恵んで頂いて、大事なものを頂いてるのに、必要なもの恵んで頂いてるのに、大事にできない。だからそれはもう、当たり前のことやけども、お詫<sup>わ</sup>びを申し上げんといかんのんですね。

神様に、それをようお詫<sup>わ</sup>び申し上げて、知ってのことはもちろんのこと、知らず知らずのことでもいいはあるから、お詫<sup>わ</sup>びするべきことってというのは、ほんとにねえ、自分で「あ、しまった！ご無礼した！」って気付くのは、氷山の一角なんですよ、きつとね。ほんととはそれよりも、もっともーっと、たーくさん、ご無礼お粗末不行き届き、あるんです。ま、それをまあ、神様が目ごぼしして下さってるだけだね。

でも、信心頂いてたら、そういうもんなんやって、それが本当なんや  
ってというのが分かってきたら、気付いたところは、しっかりお詫びして、  
お育て頂くこうとするんですけど、それでも行き届かるところがあるのは  
当たり前やから、「神様えらい申し訳ございません」言つて、で、また「気  
付かせて下さる」「っ、申上げたいんです。お詫びを申し上げてね。  
そして、「ん、ちよっども、ちよっどもええ子にお育て頂けますように、ち  
よっども、もうちよっとお利口さんにならせてもらいたいんで、神様  
どうぞお願いします」言つて、お願いしてさ。

お恵み頂いてることをお礼申し、至らるところをお詫びを申し、そし  
て、改まりを願い、そしてもうとにかく、おかげを頂かんかったらもう

504  
おひ

一時も生きていけないんですから、神様また、どうぞ、当たり前と思わずにね、頂けるのは当たり前と思わずに、「どうぞまた命恵んで下さい。水も空気も恵んで下さい。食物じしょくぶつもみな恵んで下さい。三回、一日。トイレもちゃんと行けるように、毒回らんように、悪いもん出さして下さい。そんなおかげも恵んで下さい。何から何まで恵んで下さい。お願いします、神様」って。

そうやって、お願いしてお縋りさしてもらおう。それが人間として、当たり前やろってことなんですね。それが人間やし、それでしか人間は生きていかれへんねんから、人間らしゅうしたらええやないか。何も、求めて自分の力で生きることでもできないのに、偉そうにしたり、お礼がな

ったり、我が力でやろうとしたり、「ご無礼があつてんに」、「知らんわ、そんなもん」って、「そんなんせんでええわ、お詫びなんて」って思うた  
りね。「なんでお願いせんといかんねん。俺は俺の力おれで生きてるんや」と  
か。そんなわけの分からん、求めて不思議なことをせんでええ、言うて。

人間は人間らしくしたらええ。至らん、弱い、どうにもならん、めぐり  
深いところもあるのが実際のところやから、神様のお恵みを授けて頂かんと、  
片時も生きていかれんのやから、神様にしっかりお縋りして、お恵み頂  
いて、その代わりようお礼申して、なのにご無礼がいっぱいあるから、  
しっかりようお詫びして、ほんでまた「恵んで下さい、恵んで下さい」っ  
て言うたらええって。それでしか生きていかれへんねんからなあ。それ

が人間やし。情けないっちゃそうやけど、でも、それが人間なんです。

「いやあ、そんな情けないんですか？」「いや、情けないっていう発想自体が傲慢ごうまんなんですよ。だってそれが人間やもんね。そこを勘違かんちがいして、

「えっ、人間ってそんななん？」「いや、そんなですよ。「いや、なんか弱い情けない生き物やなあって」「いやそれ、情けないっていう考え方が、どれほど人間は偉いかと、なんか勘違かんちがいして傲慢ごうまんなんです、それね。傲慢ごうまんな考え方なんですよ。所詮しゆせんその程度なんです。人間って弱いですよ。」

ただ、人間はどうしようもないし弱いけれども、神様っていう偉大なお方と、しっかりピタッとくっついて、神様と一緒に、片時も離さず

に生きてたら、自分はどうしようもない存在やけど、神様は偉大な存在やから、神様と一緒にさえ生きてたら、神様が付きっ切りなんやから、何でもうまいこといくつ。

ほら、「虎この威いを借かる狐きつね」ってようあるでしょう。狐はそんな強うないけど、虎はまあ言ったら、引き連れとったら、みんな虎が怖いからって離れてったり、道を空けてくれたりね。「神様の威を借る人間」ですよ。いや、それでいいんです。人間っていいのはね。そしたら悪い奴が来ても、悪魔がやってきて、なんか悪い棒持たってね、叩たたいてきても、神様守ってくれはるし。神様の威を借る人間っていいことなんです。でも、それが人間らしく生きるということなんです。

その、神様に恵んで頂いて、しっかりとお礼申し上げて。神様の恵みの中で、この天は父、地は母。天の恵みを受けて、地に生かされている。その天地の働きは、目に見える世界全てもそうやし、私という人間の命すみずみの隅々まで、細胞一つひとつまで、ゼーンぶお働き下さってる。それがなかったら、一時も生きることができない。

情けないとか、そんなん言ってる場合ちゃうんですよ。いったい何者やと思ってるんでしょうかなあ。ほんとにどうしようもない弱い人間。そういう思い違いしてること自体がどうしようもない存在ですよ。

だからそういう、愚かな考え方はやめて、そんな求めて不思議なこと  
はせんと、当たり前のように、人間は人間らしゅうしたらいいんです。

自分の力でなんて、なーんにもできんし、生きていけないんやから。神様神様言うて、お継りするしか存在のしようがないんやから。

「神様、ありがとうございます」「その分しっかりお礼申し上げますとあきませんわね。」「神様ありがとうございます」「もう、なのに」「めんなさい、もうほんまにいろいろ、なにかと不行き届き、相済あひすいません。でも、恵んで下さい。でないと私は生きていけませんので、神様お願いします」「言うて。嬉しいうれことあったら、「神様ありがとうございます。」「お腹が立つことあったら、「神様ちょっと聞いて下さい」「言うて。もう、悔むしいことあって、助けて欲しかったら、「神様、助けてーっー！」「って言うしね。



そうやって、いつでもどこでも何をしても、神様神様、神様神様、言うてたらいいんです。それが人間、まあもっと言うたら、生きとし生けるものはそういう存在なんです。それをよくわきまえて、人間という存在の、身分、身の丈、身の丈も丈があるんかどうかさう、よう分からんような人間ですけど、立場ですけど。それをよう分かって、この天地宇宙の中でね、ほんとに、ポンッとその辺にね、宇宙の大きな中にポンッと放り出してもう、その瞬間に死んでしまうような、そんなちっぽけな人間で、そんな人間が偉そうにしてるなんて、ほんまにもう、ちゃんちゃらおかしいでしょうねえ。

その人間が、人間らしく、自分が弱い、至らん、めぐり深いところがあ

るということ。そこをよう分かって、でも、お恵み頂いてることを、よくよくお礼申し上げ、至らんとお断り申し上げて、またお縋りしていく。人間らしくしてくれよ、と。

そしたらね、神様たくさんおかげ授けられるんですよ。ああまた、これもう、あれもやろうって。もう、おかげいくらでも授けてやることできるんですから。そしたら子どもである人間は、「ああ、よかったよかったです、嬉しいわあ」って「ニ」でできるじゃないですか。それ見て、神様「よかった、よかった」言うて。だって、神様は人間がかわいくてしょうがないんですもんね。かわいいんですから。

かわいいと思う心が、そのまま神である。それが神である。

〔理Ⅱ 近藤藤守 一七より抜粋〕

「かわいいと思う心が、そのまま神である。それが神である」「っていうご理解を、昨日ね、月例祭げつれいさいでもお話をさして頂きましたけど、だから、しっかりと神様はかわいいと思うてくれてはんねんから、「神様の愛いとし子こ」言いって、「神様の氏子うぢこ」言いって下さくださるとるんですから。

ね、人間というのは自分の力じゃなーんも生きていくことはできんし、だから、神様かみさまから食物じきもそやし、お天道様てんどうさまもそやし、光も水もそやし、

住むところもそやし、着るもんもそやし、命の中もそやし、目えも鼻も口も心臓も、排泄はいせつもぜんぶ、神様に働いて頂いて、養って頂いたらいいんです。それが人間らしいんやから。その分、ようお礼申し上げていじ。ご無礼多いからようお詫わびしていじ。で、また、お継すがりしていじ。こ  
んだけ恵んで頂いて、赦ゆるして頂いて、またおかげ下さるんやから、やっぱり、それで辛い顔しづやらしんどい顔してたらあきませんね。

だから、それに気付いたら、信心させて頂いてる人はやっぱり、嬉うれしく楽しく有り難あく過がごさして頂こうって、教祖様が仰うってるのは、そらあそうですよね。そんだけ恵んで頂いてるんですからねえ。それを情けないとかって考えるのは傲慢しうまんですよ、傲慢しうまん。思い上がりも甚はなだしいって

ことです。それをよう分からんとあきませんね、お互いね。

だから、何でもかんでも、人間は至らんのやから、もうそれが当たり前なんやから、凡夫ほんぶなんですからね。「凡夫の自覚」ってまあ言いますけど、至らん人間なんですから、弱い存在なんですから。それすらよく分かかってないから「凡夫」って言うんですよね。だから、それをしっかりとわきまえて、神様と一緒に、神様によくお礼申し上げて、神様と共に過ごさして頂く。それが、「人間は人間らしくすればよい。何も求めて不思議なことをしなくてもよい」ということ。つまりこれ、信心するってことなんです。

真まことの信心しんじんっていうのは、究極的に、人間は人間らしくするっていうこと。

人間は人間らしくすることが信心で、それを続けていって、究極的には生神いきがみになる。そういうことなんです。ま、お互いに神様の子ですから、信心して、神様とね、仲良う生きさせて頂く。仲良うなんて言うのも、畏れおそ多い言葉ですけどね。ほんとにもう、ただただ、おんぶに抱っこで、もうぶら下がるしかしょうがないんですけど。

でも、神様は私たちがかわいいと思つて、「あっち行きたい」「言ったら」よしよし、「こっち行きたい」「言ったら」よしよし「言つたら」「言つて。行きたい」と行かしてもらえますでしょ。あっち行きたいと思つて足が勝手に違う方向向くつて言うたら、これ大変ですよ。市役所行きたいって思つても、全然違うところ、一号线の方に体が行つてたらもう困りますもんねえ。

止まろう思っても止まらずに勝手に動いたら大変ですよ、これ。

せやけど、あっち行きたい言ったら行こうとするし、こっち行きたい言ったら行こうとできるしね。「あれなんやろう」と思って見ようと思ったら、違ふところに目が動いてたら困りますけど、見えるんですから。触れるさわんですから。ありがたいですよ。これみんな、神様が働いて下さってるんです。

十本の指も、神様がさわってくださるから動くのである。

「二代金光様 一〇三より抜粋」

十本の指も、神様が手を上から添えて下さってるのであるという教えがありますね。十本の指を動かすんでも、神様がその十本の上から、指の上から、手を乗せて下さってるんですよ。

これもようお結界けっかいでね、私、お取次とりつぎさしてもらおうときによろ話しますけど。「十本の指、手え出してみ」って言うたら、お結界のお盆に手え出してくる。じゃあ私、その上に手を乗せるんです。「十本の指こうやって動くけど、これ、見えへんけど、神様が十本の指の上に手を添えて下さってるんや」って。だから動くんやで。頭もそつ、目も耳もそつ、みーんなそつ、ぜーんぶ。

まあ、だからしっかりと神様がおかけ下さろうとして、ええとこ連れ



て行くうとしてくれはるんですからね。危ないところは止めようとして下されるし。それをちゃんと気付かして頂いて、生きてる間、神様と一緒に生きて、ありがたいなあ言うて、いつかお国替えくにがさしてもらえたらええですね。

今日は今日で一日しっかりと、いよいよ人間らしくならして頂けるように、信心のお稽古けいこに励はげまして頂きませう。

はい。よくお参りでした。

(了)



---

津田昇平教話 第十話

令和三年一月十日 朝の教話

令和四年二月十八日 初版発行

発行所 金光教尼崎教会

〒六六〇一〇八九二

兵庫県尼崎市東難波町三一七一五

---